

西濃農林事務所の普及活動状況 令和4年9月30日現在

今月の重点活動

■水稲 ウンカ類の一斉調査を実施

9月8日、県病害虫防除所からトビイロウンカの発生予察注意報が発表されたのを受け、9月12日から15日にかけて、管内のハツシモほ場を中心に33カ所において、ウンカ類調査を行った。

農林事務所は、JAにしみのTACと連携し、1ほ場につき連続25株×2反復で払い落としを行い、トビイロウンカ、セジロウンカ、ヒメトビウンカの成虫数とウンカ類の幼虫数を調査した。調査の結果、7カ所のほ場でトビイロウンカの成虫が確認された。

今回の調査結果については、JAにしみのHPで公開し、メールマガジンでの情報発信も行われ、トビイロウンカ防除への注意喚起を行っている。

農林事務所では、引き続き生育状況や病害虫の発生状況の把握や病害虫防除指導を行い、水稲の安定生産を支援していく。



【ウンカ類の調査】

西濃の農業・農村を支える人材育成

■新規就農者 伴走支援の取り組みを実施

新規就農者の経営安定化に向け、技術・経営両面からのフォローアップを強化するため、各市町、JA、農林事務所で構成されるサポートチームによる伴走支援を令和3年度より実施している。

今年度、支援の対象となる就農5年未満の新規就農者は40経営体あり、対象者ごとにサポートチーム員を構成、聞き取りやほ場巡回を行っている。栽培・経営状況の課題を確認し、解決策の検討を行い、関係機関への要望についての聴取も行っている。

このところの資材・燃油高の影響も受けていると思われることから、今後、融資等の更なるサポートが必要な場合は、農林事務所では個別相談会を開催し、経営安定に向け支援していく。



【個別面談の様子】

■指導農業士連絡協議会 指導力向上研修会が開催

9月13日、岐阜県指導農業士・青年農業士連絡協議会主催による令和4年度指導力向上研修会がオンラインで開催され、西濃総合庁舎においてもサテライト会場を設置し、指導農業士5名が参加した。

初めに主催者である指導農業士会長から、コロナ禍により2年ぶりの開催となったが、こうした機会を活かして、指導力の向上を図り、地域農業の核となり、担い手確保にも尽力してほしいとのあいさつがあった。

講演は、「国産振興こそ食料安全保障～農業士への期待」と題して、東京大学大学院の鈴木宜弘氏が行った。クワトロショック（コロナ禍、中国の輸入拡大、異常気象の多発、ウクライナ情勢）の中、輸入途絶は眼前にあり、食料危機はもう始まっているとのことであった。国は国内生産振興（自給率向上）を強力に進めるべきであり、農業士のみならず声も大きく上げ、経営安定化に向け努力してほしいとのことであった。

農林事務所は、引き続き農業士活動や地域農業の維持発展に向け支援していく。



【サテライト会場での研修の様子】

■女性農業経営アドバイザー 西濃ブロック役員会の開催支援

9月7日、西濃ブロック役員会が副会長の経営する農場カフェで開催された。当初は8月3日に当農園で若手農業者を交えて西濃ブロック研修会を実施予定だったが、コロナ感染者の急増時期と重なり中止となった。

役員会では、今後の活動として、10月にGLAMAいきいきネットワークの集合研修、年明け1月にはブロック研修会として地域の農産物を活かした料理研修会が予定されており、その打ち合わせが行われた。また、後期のGLAMA広報誌を発行するため、女性農業経営アドバイザーの活動をどのようにPRしていくか、議論が交わされた。

農林事務所では、引き続き女性農業経営アドバイザー活動を支援していく。



【役員会の様子】

安心して身近な「西濃の食」づくり

■有機農業 有機農業推進プロジェクトチームの中間検討会を開催

神戸町の水菜栽培で、有機農業の営農モデル実証が開始されており、9月14日、実証生産者、神戸町役場、JAにしみの、農林事務所を構成員とするプロジェクトチームの中間検討会を開催した。

最初に現地ほ場を視察し、隣接した慣行ほ場と比較し、夏秋期の課題となる害虫及び雑草の対策技術と発生状況について、現地確認を行った。

室内検討では、農産園芸課、農業経営課、農業技術センターを交え、実証ほや有機農業推進についての意見交換会が行われた。

農林事務所では、今作の栽培の終了後、収量・品質・労働時間・経費等について、慣行区との比較調査を行い、効果検証を行う予定である。



【ほ場検討の様子】

西濃の農畜水産物のブランド展開

■冬春トマト 養液栽培でスマート農業技術に取り組むグループ活動を開始

令和5年産冬春トマトは定植から1カ月ほど経過し、9月下旬には初出荷を迎える見込みである。これに伴い、海津トマト部会養液栽培研究会では、8月17日および8月19日に新たな改良を加えた環境測定機器の取り付けを行い、9月12日から生育調査を開始した。

なお、生育及び環境データは、クラウド上に保存することでスマホから簡単に閲覧することができる。また、毎日の観測データはメールで配信され、生産者がデータを参考にした栽培管理が行えるようになっている。

令和5年産では、コロナの影響で活動ができなかったグループ活動を実施し、高単収を目指していく計画である。グループは栽培システム毎に3つのグループに分かれており、8月25日、9月5日には、各生産者のハウスに集まり、生育状況や栽培でわからない点や課題について意見交換がなされた。グループ活動は、今後、1～2カ月毎に開催される予定である。

農林事務所は、各グループの自主性を尊重しつつ、オブザーバーとして支援をしていく。



【グループ活動の様子】